

---

# 遊戯王 ~ プラネットシリーズと共に ~

朱雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王～プラネットシリーズと共に～

### 【ISBN】

N4844Z

### 【作者名】

朱雀

### 【あらすじ】

引っ越しした友人から貰った謎のカード、The supreme card SUN。ひょんなことから、プラネットシリーズを集めることになった主人公 佐藤達也はどのような運命を迎るのだろうか。処女作で不定期更新ですが、温かい日で見守つてあげて下さい。

## プロローグ（前書き）

初投稿で不定期更新ですが、よろしくお願いします。

# プロローグ

プロローグ

? ? ? s.i.d.e

「本当に行つちゃうんだな。智則。」

「ああ、できれば卒業までは一緒に居たかったな。達也。」

そろそろ、日が沈みそうな時間に一人の少年は向かい合ひ。

「そうだ、俺が引っ越す前にこのカードをあげようと思つてたんだ。受け取つてくれ。」

「？　ああ。わかつた、じゃあな。また会おうぜ。」

立ち去るひとする親友に手をふりながら、俺はそのカードを見る。

The supremacy sun

俺の見たことのないカードだ。家に帰ろうとした時、何かの声が聞こえたが俺はそのまま家に帰った。

（家）

机の前でまた、貰つたカードをまじまじと見る。イラストは男の顔をした悪魔の後ろに黒い太陽があるような感じだ。このカードを貰

つてから、度々何かの声が聞こえるが何なのだ？

「まあ、考へても仕方ないか。」

・・・・・お前は私を使いこなせるか。・・・・・

「え？」

また、声がきこえた。

・・・・・フフフ、やっと声がきこえたな。・・・・・

「つーだれだ、おまえはー！」

声の主もわからぬまま、自分の頭に響いてくる声に俺は戦慄する。

・・・・・しかし、おまえが私を持ち、プラネットシリーズを集め  
るのに適しているかを調べるものが必要だな。・・・・・

何を言つてゐるんだ？ そして、俺の頭に直接響いてくることも気  
になる。

・・・・・ああ、デュエルを始めよつ。・・・・・

俺の目の前に、俺が今まで見たことも無かつた黒いデュエルフィー  
ルドが広がり、俺が持つていたThe SUNのイラストから悪魔  
が消え、田の前に立つていた。

「くつー！」

俺は本能的にデュエルディスクを構え、The SUNの手にもデュエルディスクができていた。

「「決闘！！」

達也 v s サンズ 1 (前書き)

これがなつむコロとのテキニカルです。

・・・・・まずは私のターンからだ。・・・・・

・・・・・ドロー。私はモンスターを一體伏せ、カードを一枚セット。ターンエンドだ。・・・・・

「俺のターン。ドロー。」

SUNのデッキがわからない今、まずは様子見からだりつ。

「俺は、ダーク・グレファーを召喚。そりゃ、ダーク・グレファーの効果発動。手札の墮天使ゼラートを捨て、デッキから墮天使スペルビアを墓地へ送る。いくぞ、バトル！ ダーク・グレファーでセットモンスターに攻撃！」

ダーク・グレファーがセットモンスターを切りつける。

グレイブ・スクワーマー

・・・・・グレイブ・スクワーマーの効果発動。ダーク・グレファーを破壊する。・・・・・

地面から、グレイブ・スクワーマーが出てきて、ダーク・グレファーを道連れにしていく。正直、気持ちが悪くなる光景だ。

「俺はカードを一枚セットしターンエンド。」

・・・・・まで。エンドフェイズ時に、魔法発動。終焉の焔。黒焔

トークン一体を特殊召喚する。 . . . .

これは、まずい。黒焔トークンは、闇属性モンスターのアドバンス召喚に使用できる。そして、SUNは闇属性。次のターンにはSUNが出るかもしれない。俺のセットカードでどうにかなるのか？

達也

8000 手札一枚

ダーク・グレファー セットカード一枚

SUN

8000 手札三枚

黒炎トークン一体 セットカード一枚

· · · · 私のターン。ドロー。私は黒焔トークン一体をリリースし、The supremacy SUN、つまり、私を召喚。 · ·  
ちつ、やはりきたか。

· · · · バトル。SUNでダーク・グレファーを攻撃。 · · · ·

黒い光線がダーク・グレファーへ発射される。

たしか、さつき見たときSUNの効果は、破壊され墓地へ送られた次のスタンバイフェイズ時に手札を一枚捨て、墓地から特殊召喚だ

つた気がする。ならば、除外すればいいだけだ！

「罠発動！次元幽閉！ＳＵＮをゲームから除外する！」

・・・・・甘いぞ。罠発動。王宮の鉄壁。カードはゲームから除外されなくなる。・・・・・

まずい。ＳＵＮの一番の弱点、除外が封じられてしまった。たしかに、蘇生効果も特殊召喚で奈落の落とし穴などにかかりやすいため、除外対策は必須だろう。そして、ダーク・グレファーが光線に飲み込まれ破壊されてしまった。スペルビアを落とせただけいいとはいえ、モンスターがいなくなってしまった。

・・・・・私は二重召喚を発動。さらに、私はモンスターを一体セットし、ターンエンドだ。・・・・・

二重召喚は一ターンに一度の通常召喚を行うカードだ。あの、セットモンスターは何だろう？　また、グレイブ・スクワーマーのような除去モンスターなら、次のターン、俺は3000のダメージを受けてしまうかもしれない。

「俺のターン。ドロー。」

悪くない。堕天使アスモデイウスだ。

「俺は、手札からヘカテリスを捨て、テッキから神の居城 - ヴァルハラを手札に加え、そのまま発動。さらに、神の居城 - ヴァルハラの効果で堕天使アスモデイウスを特殊召喚。堕天使アスモデイウスの効果を発動し、アテナを墓地へ送る。バトル！堕天使アスモディウスでセットモンスターに攻撃！」

堕天使アスマモディウスの翼がセットモンスターを切り裂く。

ライトロード・ハンター ライコウ

・・・・・ライコウの効果により、神の居城・ヴァルハラを破壊。さらに、自分のデッキの上からカードを三枚墓地におくる。・・・

堕天使アスマモディウスを破壊しなかつたのは、それよりも天使を特殊召喚する神の居城・ヴァルハラを破壊しておくべきだと思ったのだろう。堕天使アスマモディウスはあとで相打ちし、自分だけ復活すればいいし。

「俺はターンエンド。」

達也

6700 手札一枚

堕天使アスマモディウス

セットカード一枚

SUN

8000 手札一枚

SUN 王宮の鉄壁

・・・・・私のターン。ドロー。・・・・・

れる、このターン、どう動く？

達也 vs SUND 1 (後書き)

どうでしたか?

ライフポイント8000のテコホールは長いですね。

## 達也 v s SUN 2 (前書き)

SUNとのヒュエルの続きです。汎用カード使いすぎですね、すいません。まあ、どう考へても、あるカードの下位互換になるカードは使いませんけど。

・・・・・私は、カードガンナーを召喚し、効果発動。デッキの上から三枚墓地へ送り攻撃力が1900になる。バトルフェイズ。SUNで墮天使アスモディウスに攻撃。・・・・・

SUNの黒い光線と墮天使アスモディウスの翼がぶつかり合い、お互いにフィールドから消える。

SUNはいなくなつたが、地面からSUNの威圧感が感じられる。

「だが、ここで墮天使アスモディウスの効果発動！ アスモトークンとディウストークンを守備表示で特殊召喚する。アスモトークンは効果で破壊されず、ディウストークンは戦闘で破壊されない！」

墮天使アスモディウスのミニチュアのような赤と青のトークンがフィールドに出てきた。

よし、アスモトークンはカードガンナーに破壊されるだろうが、ディウストークンは戦闘破壊されないため、SUNの攻撃をしのげる！

・・・・・ならば、カードガンナーでアスモトークンに攻撃。さらに、魔法发动。ブラックホール。カードガンナーとディウストークンを破壊する。・・・・・

「なんだつて？」

・・・・・カードガンナーが破壊された場合、デッキからカードを一枚ドローする。私はこれでターンエンド。・・・・・

「俺のターン。ドロー。」

・・・・・スタンバイフェイズ時、手札を一枚捨てSUNを特殊召喚する。・・・・・

今引いたカードは死者蘇生。そして、セットカードはリビングデッキの呼び声。勝てる！ 本当は前のターンにも大ダメージを与えることができたのだが、ゴーズが怖かった。ゴーズを出されるとあの状況ではなにもできないからな。案の定、今SUNは最初から持っていたであろうゴーズを捨て、SUNを特殊召喚した。でも、これでもう怖いものはない。

「俺はリビングデッキの呼び声を発動。墓地から、墮天使スペルビアを特殊召喚。さらに墮天使スペルビアの効果発動、墓地から墮天使ゼラートを特殊召喚。墮天使ゼラートの効果発動、手札を一枚捨て、相手

フィールドのモンスター全てを破壊する。」

・・・・・ぐつ・・・・・

「さらに、死者蘇生発動。SUNを自分フィールド上に特殊召喚する。」

禍々しい悪魔が自分の田の前に出てくる。

・・・・・ほう。ここで全てのモンスターでダイレクトアタックすれば、お前の勝ちか。・・・・・

「ああ。これでどうだ？」

黒いフィールドが消え、俺はいつもの机の前に戻っていた。

達也 vs SUN 2(後書き)

いかがでしたか。お気に入り登録して下せつた皆さん、ありがとうございます。

## プラネットシリーズとはー? (前書き)

今回はテューハルありません。プラネットシリーズ誰に持たせるか迷います。

## プラネットシリーズとは!?

・・・・・ これほどの実力か……。なるほど、いいだろう。

「お前は何が目的なんだ？」

・・・・・私の目的は、世界に散らばってしまった、プラネットシーリーズを全て集めること。・・・・・

「プラネットシリーズ?」

・・・・・ プラネットシリーズは本来この世界には存在しなかつた。しかし、何者かの力によつて新たな12個の異世界が生まれ、その世界達とこの世界がぶつかつたことにより、その世界にあつたプラネットシリーズの一部がこの世界にやつてきてしまつたのだ。まあ、こう言つ私もプラネットシリーズの一枚だがな・・・・・

あれ、  
でも

「たしか、太陽つて、惑星じゃないよな？ 恒星だよな？」

・・・・・ 気にするな。おそらく私を作った人がバカだつたか、そ  
の世界では太陽は惑星だつたのだろう。・・・・・

バカつて……。しかも、太陽が惑星だったら、その世界昏無いじゃんかよ、どうすんだよ……。

・・・・話が変わつたな、では、お前はどうあるへ。ブランケットシ

リーズを集めるか？・・・・・

威圧感が増した。『えええええ。

「断つたら？」

・・・・・お前の心の闇を増幅させ、やれり、マインドクラッシュ  
する。・・・・・

心の闇つてあれか、アニメでは全編通して語られてるヤツ。何度も  
ラスボスになつてるもんない。そして、マインドクラッシュ。これ  
は、社長がやられたやつか。うつわ、やっぱ、つか拒否権ないじや  
んもうこれ。

「じゃ、じゃあ、何でおれなんだ？」

・・・・・それは、お前がカードの精霊の声を聞ける、数少ない人  
物だからだ。現に、お前にこのカードを渡した少年は、私の声が聞  
こえなかつただろう？もし、聞こえていたならば、お前にこれほど  
までに危険なカードを渡しあしなかつただろう。・・・・・

……危険つていう自覚あつたのかよ。

・・・・・やうやく、お前は私に勝つた。いふるとい、やうひの世界  
でプラネットシリーズを集められる人に会う機会はもう無いかもし  
れない。だから、私はお前に言つているのだ。・・・・・

「まあ、智則に貰つたカードだし……。引き受けとじて、どうや  
つてそのプラネットシリーズを集めるんだ？」

・・・・・デュエルをすればわかる。・・・・・

「どうこう」とだ?」

・・・・・さつき、お前とデュエルした時に展開された黒いフィールド……。あれは本来、プラネットシリーズ同士のデュエルで展開されるフィールドだ。プラネットシリーズをどちらかのプレイヤーが使用すれば出てくる。・・・・・

「つまり、プラネットシリーズとのデュエルの時は必ずから分かるつてことか?」

……そんなにたくさんの人とデュエルしないといけないのかよ。随分大変なことで。

・・・・・せりか、デュエルに勝てばそのプラネットシリーズはお金の手元に行く。強引な手段を使わなくともよい。・・・・・まあ、そりじゃなきゃなあ……。

・・・・・どうある?・・・・・

「いいぜ。プラネットシリーズ集めるの手伝ってやる。」

・・・・・わかつた。急がなくてもよいぞ。・・・・・

さあ、今日は新しいデッキでも創るかな。

次の日

8：10

「やばい、昨日1時までテッキ組んでたから……。遅刻だあ～～！」

授業は8：30に始まる。俺はテッキは持っていくが、教科書などを碌に持つていっていないといつ、何がしたいんだかわからない状態で家を飛び出していった。

8：25

「間に……あつた……。」

起きてから学校に来るのにいつもは30分かかる。それなのに、今日は15分で来れたというのだから、いつもがどんなにだらけているのが分かる。

「おお、達也。どうした、こんなギリギリに。」

話かけてきたコイツは竹下辰哉。よく一緒にデュエルする仲間だ。でも、同じ名前の読みで趣味も同じデュエルだから、間違いやさしい。

「じゃあ、早速デュエルしようぜ。」

「あ？ 残り5分だぞ？」

「いやさ、俺、昨日新しいデッキ創つたんだよ。」

俺と同じじゃないか。だから紛らわしいんだよ、コイツは。

「デュエル！」

「え？」

『氣づくとデュエルフィールドが展開されていた。』

「『がんばれよ～～～。』」

皆もノッてはやしたてる。

「アンタたちもバカねえ。」

「うう、コイツは大林あかり。小学校からの友達だ。」

「お前には、バカって言われたくない！ おまえ一回も成績で勝ったことないだろ！」

「うきうきわね！ 時間ないわよ！」

「ちつ。デュエル！」

宣言が遅れたが、デュエルが開始した。

## プラネットシリーズとはー? (後書き)

プラネットシリーズお互い一枚しか入つてないはずなのに、プラネットシリーズをどちらかが出さないと駄目だといつ……。見苦しいかもしません。

## 虫の恐怖ー（前書き）

なんか、タイトルでこうこうネタバレしてそうですね。

## 虫の恐怖！

「まずは、俺のターン。ドロー。」

「この手札なら……。」

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ。」

「俺が伏せたカードは神の警告。大抵のモンスターならこれで止められる。」

「俺のターン。ドロー。」

「辰哉の口元が笑つたように見える。ビービーテックなんだ？」

「俺は手札から、サイクロン発動！ 達也のセットカードを破壊する！ さらに、手札から魔法発動。おろかな埋葬。デッキから昆虫装機ホーネットを墓地に送る。」

昆虫装機か！ ORDER OF CHAOSで登場したカテゴリ。毎ターン4ずつアドバンテージをとつていつたり、ソリティアをしたりすることで有名な凶悪デッキ。辰哉のデッキがソリティア型なら、口元が笑つたことからもこのターンに1ターンキルされるかもしれない。

「俺は、昆虫装機ダンセルを召喚。さらに、ダンセルの効果発動、墓地からホーネットを装備カード扱いとして装備する。さらに、手札から甲虫装機ギガマンティスをダンセルに装備する。ギガマンティスを装備したダンセルの攻撃力は2400となる。」

……それで、ホーネットの効果で、ギガマンティスを破壊して、モンスターを大量展開し、また装備の繰り返しか。もう説明聞くの嫌なんだが。

「さらに、手札から明鏡止水の心をダンセルに装備する。明鏡止水の心は、装備モンスターの攻撃力が1300以上の場合、破壊される！」

なぜ、自分のカードを破壊したのかというと、ダンセルには装備されたカードが墓地へ送られた時、デッキからダンセル以外の昆虫装機を特殊召喚できる効果があるからだ。

……それにしても、明鏡止水の心まで手札にあつたのか。

「ダンセルの効果発動、デッキから昆虫装機センチピードを特殊召喚する。」

「そして、ホーネットの効果発動。装備カード扱いとなつている、このカードを墓地へ送ることでフィールド上のカード一枚を破壊する！俺は、ギガマンティスを破壊！」

WOW！まあ、こうなるよな……。これで、ダンセルの効果により、デッキから昆虫装機一体が出てくる。

「せりに、ダンセルの効果により、デッキからギガマンティス一体を特殊召喚する。」

「センチピードの効果発動、墓地からギガマンティスを装備！ギガマンティスを装備したセンチピードの攻撃力は2400となる！」

……あれ？俺、さつきからずっと見てるだけの気がするナビいの  
かな？大丈夫なのかな？

そんな心配をしているうちに、周りがざわついていることに気がつい  
た。ん？攻撃力の合計は……？

ダンセル1000 + センチペード2400 + ギガマンティス240  
0 + ギガマンティス2400 = 8200

……やばい。

「いやー、全員でダイレク…………あれ？先生どうしたんですか？」

「…………おまえら…………全員席に着け。」

その後、俺らが50分ずっと怒られたことは言ひませんでもない。

学校終了

「じゃあ、これからこつものな。」

「ああ。」

「いつもの、ところのは俺達がいつも学校が終わったら行っている力  
ードショッピングのことだ。」

「ふう、アンタたちのせいで今日も怒られたじゃない……。」

「お前だってはやしてただる。」

「辰哉に一ターンキルされそうになつたのにこんな偉そうなこと言  
えるの? ?? ?」

「…………くそっ! あれは、辰哉が一キルデッキだと思わなかつたから  
だよ、それに、俺の手札に冥府の使者『ゴーズがいたらどうすんだ  
よ。』

「一番最初に『ゴーズのことを言わなかつたのは、ゴーズは手札あり  
ませんでしたと言つているようなものよ。じゃあ、わたしはここで  
また後でね～～～。」

最後のフワフワさせた声が気に障る。

・・・・・達也。・・・・・

「ん? ああ、SUNか。どうした。プラネットシリーズ使いでも見つかったか?」

・・・・・そうだ。・・・・・

「マジで! ?

早っ!

「で、だれだ?」

・・・・・お前が今日『デュエル』をした竹下辰哉といつ奴だ。・・・

「えつ……。」

・・・・・お前はこれからそいつと会うのだろう。人のいない場所に呼び出し、『デュエル』しろ。・・・・・

「ちょっと待てってーどうして分かった?」

・・・・・そいつが男に怒られた時、『デッキを落としただろ?』。その時、プラネットシリーズが見えた。The tripping MERCURYというカードだ。あれはあまり強くない。手始めに

「ひみつだらう。・・・・・」

「The trapping MERCURYか。・・・・・わかつた。」

## カードショップ

「よつー達也ー！」

「まだ、あかりは来てないか……。」

「どうした？」

「いや、なんでもない。なあ、お前、プラネットシリーズって知ってるか？」

できれば、SUNの言葉が嘘であつてほしい。そんな言葉だった。

「ん？ これのことか？」

「そつやつて差し出したてきたのは、The trapping ME  
RCURY

「やうか、わかつた、こじじゃなんだしょつとあつちでデュエル  
しじゅば。」

「えつ、ちゅつ、いつもはいりで……」

「なあ、うしろ本当にデュエルしないといけないのか？」

・・・・・なぜ、そう沈んでいる？ プラネットシリーズを持つているからとにかくとも、精霊の声が聞こえなければプラネットシリーズを集めることはないだろう。それに、持っているからといって悪い人間になるわけでもない。・・・・・

「つーそりが。やうだよな。」

勘違いをしていたみたいだ。NOや闇のカードとかのことを考えすぎていた。

「なあ辰哉。俺、今プラネットシリーズを集めているんだ。だから、俺が勝つたらそのカード譲ってくれないか？ 俺もプラネットシリーズ持ってるから、俺が負けたらそれをあげるよ。」

・・・・・おい、待て。プラネットシリーズを持っているなどとア

「ラネットシーラーズの前で言つたら警戒するのが当たり前だろ？…

・

「え？？」

『氣づけば、辰哉のまわりに黒いオーラができててる。

「やばい！」

『デュエルだ！ The trapping MERCURY！』

## 虫の恐怖！（後書き）

昆虫装機強いですよね。僕の友達にも使っている人がいます。何回か召喚を止められれば勝てるのですが……。

初のプラネットシリーズを賭けたテュエル！（前書き）

なにかが違う……

## 初のプラネットシリーズを賭けたテュエル！

・・・・・奴のまわりの黒いオーラ……。すでに、自我を失つていて、MERCURYのものになつてゐるだらうな……。・・・・・

「くそつー俺が引き起こしたとは言え、危ないカードじゃないかよ！」

「達也……。始めよ!」

「決闘!！」

「私のターン……。ドロー。」

辰哉のデッキは、朝と同じ昆虫装機のはず。俺のデッキの相性は普通だ。

「私は終末の騎士を召喚……。デッキから、昆虫装機ホーネットを墓地へ送る。そして、カードを4枚セットしてターンエンドだ。」

4枚のセットカード!？辰哉、家で急いでデッキタイプを変えたな！？おそらく、スターライト・ロードでも伏せてあるのだろうが……。でも、使うか。

「俺のターン。ドロー。手札から魔法发动。大嵐。全ての魔法・罠を破壊する!」

「チーンして罠发动……。スターライト・ロード。大嵐を無効にし、スクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する。

「

やつぱりあった……。そして、白銀に光る輝かしい竜が特殊召喚される。

「まだだ…さらば、魔法発動。サイクロン。一番右のセットカードを破壊する…」

奈落の落とし穴

危ない危ない。

「モンスター一体をセットして、カードを一枚伏せる。ターンエンド。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札一枚

終末の騎士 スターダスト・ドラゴン セットカード一枚

達也

8000 手札一枚

セットモンスター一体 セットカード一枚

「私のターン……。ドロー。」

お互い最初のターンで手札をかなり消費している。動いて止められたらそのターンは終わりだらう。

「私は、昆虫装機センチピードを召喚、そして効果発「ちょっと待つた！罠発動。奈落の落とし穴。センチピードを除外する」……。 そうか、ならば、スターダスト・ドラゴンでセシトモンスターに攻撃。」

スターダスト・ドラゴンの口から、吐き出された白い光線がセシトモンスターを貫く。

### ヴェルズ・フレイス

「だが、ヴェルズ・フレイスの効果は発動する。スターダスト・ドラゴンを手札に、つまり、エクストラデッキに戻す！」

「私は終末の騎士でダイレクトアタック……。」

今度は騎士が、剣を俺に刺してきた。

「……ぐつー！」

「私はこれでターンエンド……。」

ライフポイントの差は1400だけ。次のターンで出せば貰うぜ。

「待った！ エンドフェイズ時に魔法発動。終焉の焰。黒焰トークン二体を特殊召喚！」

「そして、俺のターン。ドロー。」

おそらく、残りのセットカードの内、一枚はブラフとみていいだろう。警戒すべきはもう一枚か。

「俺は一体の黒焰トーケンをリリースし、現れよ、The sun  
remasy SUN!!!」

太陽が影に隠れ、その中から禍々しい悪魔が降臨する。デュエルティスクの演出とはいえ、凄いものは凄い。さらに、俺がSUNを出したことに共鳴するように辰哉のデュエルティスクが光だし、SUNとデュエルした時にも出た、黒いフィールドが展開された。

・・・・・フフフフフ・・・・・

あれは、MERCURYの声か？まあ、いい。デュエルで勝てば分かることだ！

「俺は、SUNで終末の騎士に攻撃！」

ダーク・グレファーーや、堕天使アスマティウスを飲み込んだ黒い光線が今度は、終末の騎士へ向けて発射される。

「罠発動……。魔法の筒。攻撃を無効にし、攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「何だつて！？」

SUNの攻撃力は3000。つまり、3000ポイントの大ダメージを俺は受けことになる。

SUNの黒い光線が筒の中に入り、今度は俺にとんでくる。

「つーーーー！」

気付いた時には、俺は壁に叩き付けられていた。

「くそつ……。俺はカードを一枚セットしてターン 반드。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札一枚

終末の騎士 セットカード一枚

達也

3600 手札無し

SUN セットカード一枚

「私のターン……。ドロー。」

「私はリビングデッドの呼び声を発動……。墓地からホーネットを特殊召喚する。さらに、レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、手札からTG・ワーウルフを特殊召喚。」

TG！？まさか、まだ代行天使は見えていないが、あれはTG代行インゼクターなのか？

「私はこの三体をリリースし……降臨せよ！The tripoli ng MERCURY！！」

## 初のプラネットシリーズを賭けたテュエル！（後書き）

結構時間がかかりました。主人公のティッキは今回、ヴェルズでした  
が、手札が少ないため、次回も活躍できそうにありません。でも、  
活躍する機会はつくります！

後、すいません。ヴェルズには終焉の焰なんて入らないと思うんですけど、ソコノを一枚でだせて、しかも、攻撃も防げて、ゾンビキヤリアとシンクロもできるから、とさまざまな理由をつけて入れました。

そして、問題の魔法の筒ですね。今はバーンティッキぐらいでしか採用されてないという……。言い訳はしません、いや、できません。しかも、TG代行インゼクターがかなり事故つてます。

## The tripping MERCURY (前書き)

MERCURY戦の続きです。

## The tripping MERCURY

MERCURY召喚の宣言と共に、フィールドに二つの剣を持つ、虫の女王が現れた。

The tripping MERCURY  
レベル8 攻撃力20000／守備力2000

「MERCURYの効果発動……。MERCURYはアドバンス召喚に使用したモンスターの数によって、効果が変わる。」

リリースしたモンスターは三体。一体リリースより強力な効果なのだろう。

「三対リリースの場合、このモンスター以外のモンスターの攻撃力は0になる……。」

「つ！」

「私はこれでターンエンド……。」

MERCURYで攻撃しなかったのは、攻撃すれば、次のターンSUNは復活しMERCURYはそのまま戦闘破壊される。しかし、攻撃しなければSUNの攻撃力は0のままで、3000に戻すためにはSUNから攻撃しなければならず、攻撃される回数が一回減るからだわ。

「俺のターン。ドロー。」

つー。これなら、賭けにでることができる！成功確率は50%ぐらいか。ダンセルとセンチピードさえ引かれなければ……

「俺は、ＳＵＮを守備表示に変更。ターンエンドだ。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札無し

MERCURY リビングデッキの呼び声

達也

3600 手札一枚

SUN

「IJの程度か……。私のターン……。ドロー。」

「ほう……。私はMERCURYを守備表示にしてターンエンド。」

よじつ！-!ける-!

「俺のターン-ドロー-！」

「俺はレスキューラビットを召喚！レスキューラビットの効果発動、デッキからヴェルズ・ヘリオロープ二体を特殊召喚！」

「一体の同じレベルのモンスターか……。」

「一体のヴェルズ・ヘリオロープでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！ヴェルズ・バハムート！」

氷結界の龍ブリューナクを闇化させたようなモンスターが召喚される。

「ヴェルズ・バハムートの効果発動！ エクシーズ素材ひとつを取り除き、手札のヴェルズ一枚捨てるにより、相手フィールド上の表側表示モンスター一体のコントロールを得る！ 僕はヴェルズ・マンドラゴを捨て、MERCURYを選択！」

「何つ……？」

MERCURYがSUNの援護もあって、俺のフィールドに来る。すると、辰哉に付いていた黒いオーラが消え、SUNに吸収された。

「……あれ？ 達也、どうしてこんな所でデュエルしてるんだよ？」

流石に、「辰哉はカードにとりつかれていたんだっ！！！」なんて言つと変な目で見られることは確定なので、適当に誤魔化しておく。プラネットシリーズを賭けたことは忘れずに言つたが。

「ふうん。まあ、いいか。負けそしだけど、そのカードの使い道分かんなかつたし。」

「じゃ、続けるぜ。MERCURYとバハムートで、辰哉にダイレクトアタック！」

MERCURYはその二つの剣で、バハムートは氷の混じった黒いビームで辰哉に攻撃した。

「俺は、ターンエンドだ。」

とりあえずは安心だ。

辰哉

3650 手札一枚  
フィールド無し

達也

3600 手札無し  
SUN バハムート MERCURY

「俺のターン！ドロー！ちえつ、サレンダーだ。手札がマスター・ヒュペリオンとサイクロンじゃ勝てないよ。」

ふう、勝てた。

## 家

あの後、あかりが来て他の人とかとも何度もデュエルした。5勝2敗。2敗は、インゼクターだった。

「なあ、ＳＵＺ。お前は、MERCURYが弱いと言っていたけど、結構危なかつたんじゃないか？」

MERCURYが騒いでる気がしたが、既にカードファイルの中なので聞こえない。つか、MERCURYって女だったんだな、辰哉の変わった口調が印象に残りすぎて、男だと思っていた。もう話す機会はないだろうが。

・・・・・そうだな、だがこれで一枚集まつたのは事実だ。この調子で、とでも言つておこう。・・・・・

辰哉が、プラネットシリーズに……。これほどまでに負けるのが怖かったデュエルは無かつた。アニメのＵＭＡはいつも、「デュエルは楽しいものだろ！」と言つていたのに。

プラネットシリーズが惑星の数だけあるとすれば、残り7枚。身近にもいるかもしれない。俺はどんな運命を辿るんだろう。

今日は一日中それを考えていた。

## The tripping MERCURY (後書き)

やつと、SICONを除く一枚目のプラネットシリーズが……でも、MERCURYはほつきり言つと弱いです。なので、これから使い分かりません。

OUG化されてないプラネットシリーズのステータスは作品上に載せるこにしました。効果はその後、キャラクターが言つので載せてません。

## 地区大会（前書き）

タイトルが「地区大会」でありながら、今回はデュエル無しです。

## 地区大会

？？？

？？？ s.i.d.e

「昨日、見たこともないカードを使つた奴がいたと話していた奴がいたよ。惑星がなんかとか言つてたから、プラネットシリーズかもね。」

「そうですか。試しに行くのですか？」

「ああ、プラネットシリーズを集めれば○○○が起じる」とがわかつたしね。咲も試してみれば？」

「私はその人のデュエルを見てからにします。あまり危険なことはしないで下さいよ。」

「わかってるや。」

次の日、学校にて

達也 side

とりあえず、事情説明だ。

俺は今、学校にいる。で、なぜ事情説明をしなければいけないのか。その理由は、なぜか、俺の席の後ろでSUNとMERCURYが授業を聞いているからだ。いや、おかしいだろ！

もうちょっと、映えるモンスターならいといとして、じつにモンスター一體が後ろについてくるとか絶望だ。

しかも時々、・・・・・彼は、剣闘獣デッキのようだ。デュエルしてみたらどうだ？・・・・・とか言つてきてうるさい。俺は十代や遊馬みたいなデュエルバカじゃないんだよ！あ～あ、ハネクリボーとかがよかつたなあ。

そんな事を考えていると、あかりが話かけてきた。

「ねえ、今日は地区大会でしょ。監も出るんだから、急がないと！」

……忘れていた。地区大会とは、いくつかの学校」とに行われている、遊戯王の大会だ。1年に一回行われている。

ここでも、遊戯王はデュエルアカデミアが造られるほどではないけれど、学校の半分くらいの人人がやっているのだから、当たり前だ。

「うん……、忘れてた。」

「大会を忘れるなんて……。早く行きましょうよ。」

## 大会後

俺の結果は8位だった。墮天使で出たのだが、準々決勝でミラーマツチになり、先に大天使クリスティアを出されて負けてしまった。4位以内に入れば市大会に出れたのだが……もうちょっと改良が必要だな。

因みに辰哉は2位で市大会進出が決定し、あかりは32位だった。まあ、大会参加人数は400人ぐらいだったから、皆良い結果を取つたと言えるのだが、

「よっしゃ～、市大会進出～！」

せつめいかいすうひとこいつに語っているのが、ウザい。

「はあ～～。いいなあ～市大会。あたし、一回も出た事が無いし……。」

……あかりのデッキはクリボーデッキだ。つまり、機雷化や増殖で頑張るデッキなのだが、世間一般ではファンデッキと呼ばれている。それを、クリボーかわいいなどという理由で作るのは凄いと思う。しかも、結構勝ってるし。

「辰哉、市大会つていつだつたつけ？」

「え？ 一週間後だけビ？」

「ふーん。わかつた見にいくよ。」

「応援よろしく～」

あと一回『テュエル』に勝つてれば、市大会に出れて、たくさんの人を見ている中で『哥イツ』を無残にぶつぶつぶせたかもしれないのに……。

「つーあたし、ちょっと学校に忘れ物してきちゃった！ なんで、大会の時気付かなかつたんだろ？」

「じゃあ、取つてこいよ。」

「それだけ？ 取つてきてくれてもいいんじゃないの？」

「いや、それはない。」

当たり前だ。だれがパシリになるか。

「……じゃあ、あたしはこじで。」

その後、辰哉とも別れ家に入ろうとしたところ、家の前に一人の少女がいた。

「あの……うちに何か用ですか？」

「あの、佐藤達也さんって方はいらっしゃいますか？」

「えっと……俺ですけど。」

「つーそうですか。あの、デュエルしませんか？大会で見たんですけど、それでデュエルしたくなつて！」

「いいですけど……あの誰ですか？」

「あつ、私は永澤咲つていいます。あの、できれば、The sun premacy SUNつてカード見せて貰えますか？」

俺は大会中にSUNを引けば、プラネットシリーズを集めるためとか、死皇帝の陵墓で出しやすいことから、SUNを呑喵してしまっている。地区大会では、会場には係の人がいるものの、それぞれのデュエルに審判はない。デュエルディスクでも全て判定できるからだ。流石に都大会とかになると観客も増えるし審判もいるけどね。

触りせるのは拙いかもしけないけど、見せるだけならいいだろ。

「IJKのカードだよ。」

…………やめろ…………見せるな……………

?なんでだ?それにもう見せてしまった。

…………うう…………

「ふふふ、姿はみせなくとも声だつて聞こえるんですよ?」

なんの事を……まさか!

「お察しの通りです。私には精霊が見えるんですよ。まあ、あなたもそのようですが。私、プラネットシリーズも持ってるんですよ。どうします?デュエルしますか?」

プラネットシリーズを相手が持っている以上、デュエルするしかない。今逃げても、状況が悪いときにもう一度挑まれるだけだ。その時は逃げられないかもしね。

「…………わかった。やるう。」

お互にデュエルディスクを構える。

「「決闘!」」「

## 地区大会（後書き）

SUNが見える人がはやくも登場しました。

永澤 咲さんが何をしていたか、ですが、彼女は今回の地区大会には出ず、プラネットシリーズを使っている人がいないかを探していました。

## 謎の人物！？（前書き）

まだ、あんまり、話数がないのに核心にせまつてきました。

## 謎の人物！？

学校

あかり s.i.d.e

なんで、忘れ物なんかしちゃつたんだろ。あ～あ、めんどくさい。

「先生、あの、忘れ物しちゃつたので教室に取りに行つてもいいですか？」

「ん？ ああ、大林か。いいぞ。」

この学校って広いから、教室まで来るのに時間がかかるのよねえ。  
まあ、いいけど。

ガサガサツ

ん？ 何の音だろ？

「ふう、やつとみつけたよ。」だが、佐藤達也君の席か。やつぱり、  
少しだけど感じるね。」

「あの……何をしているんですか……？」

「ん？ ちょっと、彼に用があつてね……。って、君は大会の時のー」

「ーこの人、私が負けた相手じゃない！」

「君もーこの学校なのか……。面白いな。」

「え？」

「いや、なんでもない。じゃあね。」

「え、ちょっとー。」

帰ってしまった。

その後、私は忘れ物をとつてから帰った。

## 達也の家の前

達也 side

俺は家の前にいた、カードの精霊がみえる、と言っている少女とデュエルしている。

「俺のターン。ドロー。」

最高の手札だ。

「俺は、モンスター一体をセットし、カードを一枚セット、ターンエンドだ。」

「私のターン。ドロー。」

「私は、魔法発動、次元の裂け目。墓地へ送られるモンスターは全て除外されます。」

やつかいなカードだ。だが、今は作戦通りにするべきだろ？

「私は、神獣王バルバロスをリリースなしで召喚します。バルバロスのレベルは8、攻撃力は3000ですが、リリースなしで召喚でき、攻撃力が1900になる効果があります。」

それでも、通常召喚できる攻撃力1900モンスターだ。強いな。

「私は、バルバロスでセットモンスターに攻撃します。」

バルバロスの持っているスピアーガ、カードごと貫く。

スポーク

「残念でしたね。スポークは、墓地の植物族一体を除外し墓地からその分レベルを上げて特殊召喚する効果がありますが、次元の裂け目により、ゲームから除外されます。」

寧ろ、お前のほうが残念だったな。説明は負けフラグだ。

「私は、カード一枚セットし、ターンエンドです。」

「ターンエンド前に、魔法発動。サイクロン。今伏せたカードを破壊する！」

スキルドレイン

危ねえ、破壊としてよかつた。

達也

8000 手札三枚  
セットカード一枚

咲

「俺のターン。ドロー！」

SUNを引いた。流石に、テンションが上がってきた。

「俺は、レッド・ガジェットを召喚！効果を発動し、デッキからイエロー・ガジェットを手札に加える！」

「ガジェット……。それぞれがサーチしあう効果を持ち、除去しながら戦うデッキですか。」

「さりに、罷発動。血の代償！500ライフポイントを払い、もう一度通常召喚できる。俺は、500ライフ払いさつき手札にえた、イエロー・ガジェットを召喚！効果発動。デッキからグリーン・ガジェットを手札に加える！」

「さりに、500ライフ払い、グリーン・ガジェットを召喚！効果発動。デッキからレッド・ガジェットを手札に加える。」

これの繰り返しにより、俺の場には、レッド×2・イエロー×2・グリーン・ガジェットの5体のモンスターが並び、さりに、グリーンガジェットを手札に加えることができた。

「俺は、また500ライフ払う。レッド・ガジェットとイエロー・ガジェット一体ずつをリリースし、現れよ！The suprem

a  
c  
y  
  
S  
U  
N  
!  
!

何度見ても迫力のある、禍々しい悪魔が召喚された。

だが……The tripping MERCURYの時には展開された、黒いフィールドが展開されない。

・・・・・「れは……恐らく、彼女がプラネットシリーズを持つて  
いない、ということだろう。・・・・・

「ソニーが苦々しい顔で告げる。

1

確かに、彼女はSUNEの声が聞こえていたし、姿も見えるようだが、精霊の姿が見えるとはいっても実際にプラネットシリーズを持つているかどうかは別なのだ。

「……おまえ、プラネットシリーズを持つているって話は、俺にデュエルさせるための嘘だな？」

「バレちゃいましたね。そうですよ、プラネットシリーズを持つて  
いるって聞いたのでデュエルしたかつただけです。」

「くそつ！何でこんな事をしているんだ？」

「……。デュエルはまだ終わっていませんよ。」

スルーされた。言いたくない理由があるのか、それとも、ただスルーしただけなのか。後者だつたら泣けてくる。

「俺は、グリーン・ガジェットを召喚。効果を発動し、レッド・ガジェットを手札に加える。」

「そして、リミッター解除を発動！全ての機械族モンスターの攻撃力は二倍になる！」

「ＳＵＮでバルバロスに攻撃、ガジェットでプレイヤーにダイレクトアタック！」

80000 - 11100 - 28000 - 26000 - 24000 - 28000 =  
- 4700

オーバーキルで勝った。しかし、納得がいかず、訳の分からぬ事もたくさんあつた。永澤さんに話を聞こうとしたところ、既に彼女はいなかつた。

「なあ、ＳＵＮ。プラネットシリーズを持つている人が集めるのはいいとして、何でプラネットシリーズを持つていない人まで興味を持つているんだ？」

・・・・・ 楽観的にみれば、珍しいカードだから、という理由だろうが、そうではないだろうな。私にもわからない。・・・・・

その後、俺は、何事も無かつたように家に帰つた。

? ? ? -

? ? ? s . i d e

「どうだつた？」

「……1ターンキルの上、4700のオーバーキルでした……。次  
は……。」

「まあ、いいじゃないか？僕だって目当ての人を一人も見つけちゃ  
つたし。」

## 謎の人物！？（後書き）

主人公の今回のデッキは代償ガジェットです。NO.16でトラゴエディアとゴーズなどを防ぐのが普通でしょうが、できるだけオーバーキルしたかったので、エクシーズはしませんでした。

## 辰哉の協力を得るために（前書き）

今回は「デュエル無し」です。なんか、デュエルのほうが本編の他の部分より長いような気がするのですが、まあ、気のせいでしょう。

……日常の話書くのが難しい。

## 辰哉の協力を得るために

### 達也の家

達也 side

永澤咲さん……彼女はプラネットシリーズが見たいこと書っていた。  
さうじ、それを調べる理由もあるようだった。

「何が目的なんだ……？」

プラネットシリーズを集めることに何か意味があるのか。

「くそっ！ わからない！」

どうする、誰か頼りになる人は……。

辰哉？ いや、これ以上関わらせないと決めた。

なら、あかり？ もつとだめだ、もとから関わってないのにわざわざ  
関わらせるなんてバカバカしすぎる。

俺は携帯を手にとった。

「辰哉、少し話がある。」

## カードショップ

俺は、いつものカードショップに行つた。既に、そこにはもう辰哉がいた。

「で、何? 話つて?」

「いきなりだけど、プラネットシリーズのこと詳しいか?」

「え?」

「お前が持つてた、MERCURYとかのことだ。」

「ああ、あれか。で、それがどうかしたのか?」

「あれには、カードの精霊が宿ってる。」

「…………」

おもいつきり変な人を見るような目で見られた。こんななんだから、この世界は不条理なんだ……。

「ま、まあ、気を取り直して。なんで、そんなこと言つんだ?」

「俺は、最初に、引っ越したある友人からThe supreme  
cy SUNってカードを貰った。で、俺は、そのSUNに頼まれ  
てプラネットシリーズを集めることになった。そしたら、お前がプ  
ラネットシリーズを持っていることを知った。」

「うん。それで?」

「俺は、お前に話を聞いたけど、その途中で俺もプラネットシリー  
ズを持つていることを言つてしまつた。だから、お前はMERCU  
RYに取り憑かれ、俺とデュエルした。」

「なんで、達也がプラネットシリーズを持っている、って言つたら  
いきなりMERCURYは俺に取り憑いてお前とデュエルしたんだ  
?それに、お前はデュエル中に自我があつて、俺は自我が無かつた  
んだ?」

「…………あれ?」

なんでだろ？

「なんでなんだ、ＳＵＮ？」

ＳＵＮが俺の『テッキケースから現れた。呼び出す度にこいつなるのは、結構精神的にきついんだが。だって、俺の体以上の大きさがある悪魔が出てくるんだぜ、そりゃ怖いだろ。

・・・・・それは、彼が精靈を見えないからだ。お前は、私と話すことができ、デュエルもして、お前の方が強いことがわかつたが、彼は精靈と話すことができないため、MERCURYの意思で『デュエルをした。・・・・・

なるほどビ、やうこいつとか。

「ナウヒーハヒヒ」と「ヒー。」

「え？ つつか、達也誰と話してたんだよ。」

「ああ、プラネットシリーズの一枚、ＳＵＮと話してた。」

「……まあ、まだ信用できないけど、いいや。それで、理由は？」

「理由は、辰哉が精靈と話せないかららしい。俺は、ＳＵＮと『デュエルし、勝つたからＳＵＮより強い』ことがわかつたけど、お前は、精靈と話すことができないからMERCURYが実力を知ることができず、MERCURYの意思で『デュエルをしたらしい。』

「うーん。だけど、その話は全部、カードの精靈がいるって前提の話だよな。いなれば、全部成り立たない。」

それは、そうだ。カードの精霊が見えない人は、カードの精霊がいてもいなくても、精霊は見えないのだから。

「……なら、いくら議論しても仕方ないな。それなら、これはどうだ？俺と達也がデュエルして、俺が勝つたら、カードの精霊がいいこととする。達也が勝ったなら、カードの精霊はいることとし、俺もできる限り協力する。」

それは……

「もちろん、お前が負けても俺が、カードの精霊がいるってわかるよつなことが起きれば、カードの精霊のことは信じるけどな。」

それだつたらいいだろ？

「わかった。やろう。」

お互いにデュエルディスクを構えた。

「「決闘！！」」

辰哉の協力を得るために（後書き）

永澤さんとの「デュアルを終えたら、日常の話を書いて」としたのですが、この手の話って休みがつくれないようで、どんどんストーリーが進んでいってしまいます。とりあえず、一段落させないとけないみたいですね。

▼ s 辰哉（前書き）

みんながみんな新しい「トリッキ」を使うので、整理が大変です。  
デュエルの話は一話で終わらない」とが多いです。

「まずは、俺のターン、ドロー。」

先攻をとられた。今回はどうなん『テッキでくるんだ?』

「俺は、エーリアン・ウォリアーを召喚!さらに、魔法発動、古代遺跡コードA!カードを一枚セットしてターンエンドだ。」

エーリアンか!辰哉が一番最初につくった『テッキだ。

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、『テッキの上からカードを三枚墓地に送り、光の援軍を発動!』デッキから、ライトロード・ハンター ライコウを手札に加える。」

墓地に送られたカードは……

ブラック・ホール ドッペル・ウォリアー トランプ・スタン

「俺は、モンスターを一枚セットし、ターンエンドだ。」

もちろん、ライコウをセットした。

辰哉

8000 手札三枚

エーリアン・ウォリアー 古代遺跡コードA セットカード一枚

達也

8000 手札五枚  
セットモンスター一体

「それは、ライコウか？俺のターン、ドロー。」

「俺は、クリッターを召喚！バトルフェイズ、俺はクリッターでセットモンスターに攻撃！」

クリッターが裏側のカードに向かって、突っ込んでくる。

ライトロード・ハンター ライコウ

「俺は、ライコウの効果発動。フィールド上のカードを一枚破壊する！」

破壊すべきなのは、セットカードか古代遺跡コードAだが……

「俺は、古代遺跡コードAを破壊！」

このカードは後々厄介になるだろう。

「その後、デッキの上からカードを三枚墓地へ送る。」

送られたのは、スパート 調律 クイック・シンクロンの三枚だ。

「なら、俺は、エーリアン・ウォリアーで達也にダイレクトアタック！」

槍が俺を突き刺す。

「ぐつ……」

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、手札からジャンク・シンクロロンを召喚ーーさりに効果発動、墓地からドッペル・ウォリアーを特殊召喚！」

「さりに、手札からレベル・ステイーラーを捨て、クイック・シンクロロンを特殊召喚！」

「クイック・シンクロロンのレベルを1下げ、墓地からレベル・ステイーラーを特殊召喚するーーそして、レベル4クイック・シンクロロンにレベル2ドッペル・ウォリアーをチューニング！」

クイック・シンクロロンが四本の輪になり、ドッペル・ウォリアーを包みこむ。

「シンクロ召喚！現れよ、ドリル・ウォリアー！」

ドリル・ウォリアーのチューナーは、ドリル・シンクロロンに固定されているが、クイック・シンクロロンはシンクロロンと名のつくモンスターの代わりとすることができる。

「さりに、シンクロ素材になつたドッペル・ウォリアーの効果発動。ドッペル・トークン一体を攻撃表示で特殊召喚するーーしかし、フィ

ールドのモンスターは四体のため、トーケンは一体だ。」

「そして、レベル3ジャンク・シンクロンとレベル1ドッペル・トークンとレベル1レベル・ステイラーをチューニング！現れよ、A・O・Jカタストル！」

今度はジャンク・シンクロンが三本の輪になり、ドッペル・トークンとレベル・ステイラーを包み込むことにより、A・O・Jカタストルが特殊召喚される。

「バトルだ！ドリル・ウォリアーでエーリアン・ウォリアーに攻撃！」

ドリルがエーリアン・ウォリアーを削りきる。

「だが、エーリアン・ウォリアーの効果発動。ドリル・ウォリアーにAカウンターを二つ乗せる！」

「さらに、A・O・Jカタストルでクリッターに攻撃！」

今度はクリッターに体当たりする。

「だが、クリッターの効果発動。デッキから、エーリアン・モナイトを手札に加える！」

仕方ない、今はモンスターを減らしておきたい。

「俺はドリル・ウォリアーの効果発動。手札を一枚捨て、このカードをゲームから除外する！」

「俺が捨てたのは、ダンティライオン。ダンティライオンの効果により、綿毛トーケン一体を守備表示で特殊召喚！」

「俺は、ターンエンドだ。」

辰哉

6200 手札四枚

セットカード一枚

達也

6200 手札一枚

A・O・Jカタストル 綿毛トーケン一体

「俺のターン、ドロー。」

辰哉はおそらく、このターンでさつき手札に加えたエーリアン・モナイトの効果によりあのモンスターを呼び出すだろう。

「俺は、エーリアン・モナイト召喚！さらに、効果を発動し、墓地からエーリアン・ウォリアーを特殊召喚する！」

「俺は、レベル1エーリアン・モナイトに、レベル4エーリアン・ウォリアーをチューニング！」

エーリアン・モナイトが一本の輪になり、エーリアン・ウォリアーを包み込む。

「現れよ、宇宙獣ゴルガー！」

地球を侵略するための、巨大な獣が現れる。

「俺は、宇宙獣ゴルガーでA・O・Jカタストルに攻撃！」

「？カタストルの効果を知らないにのか？カタストルは、闇属性モンスター以外と戦闘を行う時、そのモンスターを破壊する…」

「効果くらい知ってるよ、俺はセットされていた魔法発動、月の書！カタストルを裏側守備表示に変更する！」

カタストルの効果はダメージ計算前に発動する効果だ。裏側になってしまえば、効果は発動されない。

ゴルガーのたくさんの触角から光線が出て、カタストルを焼き尽くす。

「俺は、フィールド魔法、古の森を発動。」

フィールドが、木々の隙間から木漏れ日がもれだす森になった。

「古の森の効果により、守備表示の綿毛トークンは全て攻撃表示になる。」

「そして、ゴルガーの効果により、古の森を手札に戻しゴルガーにAカウンターを一つ置き、また古の森を発動。ターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー。」

さあ、出せせてもらひづぜ。 SUN を！

精靈



▼ s 辰哉（後書き）

今回の主人公の「テッキはジャンクドッペルです。規制かけられたの結構痛いですね。

あと、章を追加することにしました。

## 辰哉との決着 そして……（前書き）

はい、決着です。残りの「テュエルがとても短くなってしまったので、次話にするつもりだった話も入れました。

## 辰哉との決着 そして……

「スタンバイフェイズ時にドリル・ウォリアーはフィールドに特殊召喚され、墓地からジャンク・シンクロンを手札に加える。」

呼ばせてもらおうか！

「俺は、綿毛トークン一体をリリースして、アドバンス召喚！The supremacy SUN！」

説明はもう飽きた。

「辰哉、これがプラネットシワーズだ！」

「…………いや、俺にはよくわからないし。まあ、言われてみればそうなのか、ぐらいだよ。」

「まあ、いいや。俺は、魔法発動。死者蘇生。墓地からA・O・Jカタストルを特殊召喚！さらに、ジャンク・シンクロンを召喚し、効果発動！墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚！」

「…………一レベルの合計が9になる組み合わせがあるっ！」

「レベル3ジャンク・シンクロンにレベル5A・O・Jカタストルとレベル1レベル・ステイラーをチューニング！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシュー！」

「トリシューラの効果発動！手札一枚と宇宙獣ゴルガーと墓地のHリアン・モナイトをゲームから除外する！」

「バトルフェイズだ。トリシュー・ラビドリル・ウォリアーでダイレクトアタック！…どめはソシニでダイレクトアタックだ！」

6200 - 2700 - 2400 - 3000 = - 1900

「……負けた……。」

「なんか悪いな。こんな形で協力してもらうなんて。」

「いや、それが条件だろ、これでいい。プラネットシリーズのことでなんかあれば、俺を頼れよ。」

「……ありがとう。」

「これは、辰哉の株を上げるためのイベントなのか？  
まあ、協力してくれるんだし、ありがたい。」

「じゃ、俺はいいぞ。」

「ああ、また明日な。」

「今日が、市大会の日ね。」

一時間前

あかりはそのまま引きずりれるようにして、デュエルをせられてしまった。

どうしてこうなった……。

一日後、デュエル会場

「あかりさん、デュエルだ！」

「え？ 何？ ちょっとー！」

「ああ、俺、どじまで勝てるかな?」

「昆虫装機なら、結構勝てるんじゃないか?」

『昆虫装機』で市大会に進出した、といつ話は他の大会でも多い。

「じゃあ、ちよっと手続きすませてくれ。」

「行ってらっしゃーー。」

「辰哉遅いな。」

「うん、もう一時間になるかも。まあ、あたし達は他の人が『デュエル』してるの見てるから退屈しないけど。どうするの? 探しに行く?」

「ああ、そろそろ大会開始するしな。」

あいつは大会で女人に声をかけるようなやつじゃないし……なにかあつたら大変だ。

そんなに探さなくとも、辰哉は見つかってた。だが……

「ねえ、ちょっと大会一緒にまわるみ。ここでしょ~。」

「いや、俺待ち合わせてる人がいるから……」

「そんなのいいじゃん。」

「……だめだろ。つつか、なんで俺に付きまとつてくるんだよ。」

「一回惚れしたの！」

「なにがあった！」

「…………」「…………」「…………」

そんなやり取りをしている辰哉の姿があった。すると、辰哉がこっちを振り向いた。できれば、関わりたくないがダメなようだ。

「つー達也、あかり！助けてくれー！」

「…………なにしてんだよ…………。」

「つーそつだ！竹下奈津美さん、この人が俺の彼女の大林あかりだー！」

「えつ、あたしそんなこと一度も…………」

辰哉今、あの女の子のこと竹下さんって言つたよな。の人たち結

婚してたのか。その上、あかりを彼女だと呟つなんて……

「おー、達也！それは本来、心の中で呟つ台詞だ！それに、この人と俺は結婚なんかしてない！ただの同姓だ！」

おお、知らないうちに声に出していたのか。一瞬、地の文を読むな、つて言いつになつたよ。

「つむか、あたし一回もアンタの彼女になんかなつたことないわよ！」

「ほひ、辰哉君。やつまつてるじやない。」

辰哉、八方塞がりだ。諦める。

「いや……。そうだ、竹下さん、あかりとデュエルしてくれ！あかりが勝てば、竹下さんは俺から一生離れてくれ。」

一生つて……。そんなに嫌なのか。それに、デュエル万能説をこれ以上支持するなよ、気のせいいか、この頃俺のまわりにリアリストがないんだよ。

「…………わかつた。」

そして、今に至る。

巻き込まれたあかりは渋々といった感じでテュエルを開始した。

「「決闘！！」

## 辰哉との決着 そして……（後書き）

辰哉君が凄い」とに……

でも、本当はクリボーテックの「トヨエル」を書きたかっただけだったりします。

ただ、あかりの引きがあまりにも凄いです、『ア承ください。

## 戻戻の波乱ー（前書き）

やつと書きたかったクリボー「トッキ」の「トコホル」です。

## 辰哉の波乱！

「じゃあ、まずはあたしのターンね。ドロー。」

あかりの持っているデッキはクリボーだけのはずだ。

「あたしは、クリボーを召喚！さらに、カードを三枚セレクトエンディング。」

クリボーを攻撃表示……なら、あのセットカードは十中八九あれだ  
らう。

「クリボーを攻撃表示？バカなの？私のターン、ドロー！」

「私は炎熱伝導場を発動、デッキからラヴァル炎火山の侍女を一体  
墓地へ送る。」

いきなり、伝導場か。これで真炎の爆発が竹下さんの手札にあれば、  
あかりはかなりキツいかもしれない。つか、竹下さんって言い方  
紛らわしいな。俺は、辰哉のこと辰哉って呼んでるからいけど。

「侍女の効果発動！一体はデッキからラヴァル炎樹海の幼女を墓地  
へ送り、もう一体はラヴァル炎火山の侍女を墓地に送る！さらに、  
今墓地へ送った侍女の効果を発動し、デッキからラヴァル炎湖畔の  
淑女を墓地へ送る！」

一気に五体のモンスターが墓地へ送られた。

「私は、ラヴァル・ランスロッドをリリース無しで召喚する！ラヴァ

アル・ランスロッドはレベル6だけど、リリース無しで召喚できるんだよ。その場合は、エンドフェイズ時に破壊されるけどね。」

「さらに、魔法発動。真炎の爆発！墓地の守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚できる！」

特殊召喚されたのは、ラヴァル炎火山の侍女一体とラヴァル炎湖畔の淑女とラヴァル炎樹海の幼女だ。

「いくよー！ ラヴァル・ランスロッドとラヴァル炎樹海の幼女をチューニング！ シンクロ召喚！ レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

赤い悪魔竜が出てきた。この布陣はあの竜を出すためだろ？

「さらに、レッド・デーモンズ・ドラゴンとラヴァル炎火山の侍女とラヴァル炎湖畔の淑女をダブルチューニング！ シンクロ召喚！ スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

今度は本命の巨大な悪魔竜が特殊召喚された。その巨大さに他の大会参加者までこのデュエルを見るようになつた。

「やばい……あかり、お願ひだから勝つてくれ……！」

隣で辰哉が必死にお願いをしている。変な画だ。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは墓地のチューナーの数×500ポイント攻撃力がアップする！ だから、攻撃力は6000！」

さらに、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは相手のカードの効果で破壊されず、攻撃された時も除外して無効にすることができる。と

ても強力なモンスターだ。

「いくよ！バトルフェイズ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでクリボーに攻撃！」

まあ、セットカードを発動するだろう。

「あたしは、セットされてた魔法をクリボーをリリースして発動。増殖！自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り特殊召喚する！」

あかりのフィールドにモンスターはない。つまり、五体のトークンが特殊召喚される。

「えっ！なら、私はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンで一体のクリボートークンを攻撃！」

あっけなく一体は破壊された。

「私は、これでターンエンド。この時、フィールド上の侍女はゲームから除外される。」

? セットカードが無いのか。なら、あかりが動くかもしれない。

あかり

8000 手札一枚

クリボートークン五体

セットカード一枚

奈津美

8000 手札三枚

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

「あたしのターン。ドロー。」

あ、あかりが笑ってる。わかりやすい人だなあ。

「あたしはプリーステス・オームを召喚！さらに、プリーステス・オームの効果発動！自分フィールド上のクリボートークン四体と自身をリリースして、一体につき、800ポイントのダメージを与える！」

「つてことは、私は4000ポイントもダメージを受けるの！？」

クリボートークンやプリーステス・オームが竹下さんに体当たりしている。

……あれ痛そうだなあ、一回だけだと思ったら、何回も体当たりしてるし。

「さらに、あたしはセットされてた罠を発動。リビングデッドの呼び声！墓地から、プリーステス・オームを特殊召喚！」

決まったな……。ここで、無意味にプリーステス・オームを特殊召喚する意味は無い。ならば、あかりはこのターンで決着をつけようとしているのだろう。

「さらに、魔法发动。クリボーを呼ぶ笛！デッキから、クリボーを特殊召喚して、増殖を发动！四体のクリボートークンを特殊召喚す

るー。」

「えつ……もしかして私……」

「プリーステス・オームの効果発動！五体全てをリリースして、4000ダメージを」「えるー。」

「あひ、あやああああ！」

4000 - 4000 = 0

「良かつた～。あかりが勝つてくれて。」

スカーレッド・ノヴァ・ドランクはこいつを見て、悲愴な顔してたけどな。

そういえば、あかりはスカーレッド・ノヴァ・ドランクにはこいつをい触れなかつたな。まあ、機雷化で破壊できないからか。

「ねえ、ちょっとあかりさん来て。」

「えつ、あたしが勝ったから、それで終わりじゃないのー。？」

あかりは修羅場になるよつだ。

「やうやく、大会始まるから、見ててくれよー。」

辰哉は次々と勝ち抜いていった。

それが途切れたのは、準々決勝のことだった。それに、俺が隣のデュエリストと話している間の一分で負けてしまった。

「僕は、攻撃力7600のThe big SATURNで昆虫装機ダンセルに攻撃！」

俺が見れたのはここだけだつた。

奴をたおすぞ。

「…………わかってるさ。」

## 辰哉の波乱！（後書き）

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが空氣化してしまった……。

まあ、クリボーデックの基本的な除去の仕方は機雷化ですので、それが効かない相手はスルーするしかないんですけどね。

あと、数デュエルで、ただプラネットシリーズを集めるだけの話は終わると思います。

## The big SATURN(前書き)

今回、微妙なところでわけてしましました。

## The big SATRUN

「……残念だつたな、辰哉。」

「……ああ。だけど、見てたならわかってるよな、あいつプラネットシリーズ持つてたぞ。」

俺が、辰哉が負けた最後のデュエルの、しかも一番最後しか見てなかつた」とは言わない。

「俺、大会終わつたらあいつにデュエル挑んでくる。」

「がんばれよ。あいつは強かつたぞ。」

そのプラネットシリーズ使いはそのまま優勝してしまつた。

「おー、デュエルしろよ。」

「ん？ああ、佐藤君か。」

「いっ、俺の名前を知ってる！？」

「なにをそんな驚いた顔をしてるんだい？同じ者（プラネット使い）としては、他の人のことは知つて当たり前だよ。」

「おまえ……」

「大丈夫だよ、安心して。僕のプラネットシリーズの数は一枚だけだから。」

自分のプラネットシリーズの数を態々教えた……？

「まあ、僕はカードの精霊と話せるけどね。ああ、そこそこいる咲も精霊が見えるよ。」

奥にいた少女が俺に向かつて頭を下げる…………って、あの人は永澤さんじゃないか！

「まあ、わからないこともいろいろあるだろうけど、とりあえずデュエルしようよ。」

そして、大きな声を出す。

「市大会優勝者（まあ、日本の王者になる氣もあるけどね）、この平恭介全力でお相手しよう！……！」

……？何がしたいのかと思つていると市大会優勝者のデュエルといふことで、たくさんの人人がこのデュエルを見ようとしている。しかも、なぜか決勝戦のフィールドに連れてこられた。

まさか、こいつ！

「？ああ、安心しなよ。僕は別に、他の人が見ているところだからプラネットシリーズが出しちら、なんて状況がつくりたいわけじゃない。僕も、どんどん出すよ。」

なにが目的なのかわからない……この感覚は永澤さんの時と同じだ……。

「決闘！！！」

「まずは僕のターンからだね。ドロー。」

あいつは、さつきデッキを変えていた。プラネットシリーズ使いが相手だから、本気のデッキを使うのか……いや、それなら他のプラネットシリーズ使いに遭遇する可能性の高い本戦で使うはずだ。それとも、俺程度の相手なら、弱いデッキでもいいってことか……いや、態々弱いデッキにする必要がない。何故だ？

「（フフフ、彼はとまどっているようだね……。彼は僕の目的に気が付いていないみたいだ。あかりさんもまだいないし……。）僕は手札からおろかな埋葬を発動し、デッキからThe big SATURNを墓地へ送るよ。」

プラネットシリーズの存在が宣言されたことにより、黒いフィールドが展開される。

つか、このフィールドは、プラネットシリーズを召喚しなくとも、その存在が確認されれば展開されるんだな。

さらに、まわりの人が謎の黒いフィールドにざわついている。

「僕は、1000ライフ払い、魔法発動。深淵の指名者。属性と種族を宣言して、そのモンスターを相手はデッキか手札から墓地へ送る。僕が宣言するのは、闇属性・悪魔族だ。」

SUNを狙つたのか。だが、甘い！

「俺は、デッキから暗黒界の龍神グラファを墓地へ送る！」

俺のデッキは暗黒界だ。

「ふーん。暗黒界か。君はいろんなデッキ使うから、SUNと同じ属性・種族のモンスターが入ってるデッキとはデュエルしないと思つたんだけど、僕も運が悪いなあ。」

「どうするんだ？」

「僕は、死者蘇生を発動して、墓地のSATRUNを攻撃表示で特殊召喚するよ。そして、カードを一枚セットして、ターンエンドだ。

」

攻撃もできないのに、SATRUNを蘇生？暗黒界の除去力を知らないのか？

「別に、僕はプレイミスをしたとは思ってないよ。」

あいつは不敵な顔をしてこっちを見ている。

「考へても始まらない！ドロー！」

「俺は、暗黒界の取引を発動。お互いカードを一枚ドローして、一枚捨てる。俺は、暗黒界の龍神グラファを捨てる。」

「僕は、ネクロ・ガードナーを墓地へ送るよ。」

ネクロ・ガードナーか、厄介なカードだ。

「（デュエルを引き伸ばすために、このカードを入れたけど、暗黒界なら早く決まってしまうだろうなあ。）それで、グラファの効果を発動かい？」

「ああ、俺はSATRUNを破壊！」

プラネットシリーズがあつけなく破壊される。

「フフシ、SATRUNが相手のカードの効果によって破壊されたため、効果発動。お互いは、その攻撃力分のダメージを受ける。」

つーお互いに2800のダメージか！

「でも、僕はダメージを受けたくないから罷発動。地獄の扉越し銃。自分が受ける効果ダメージは代わりに相手が受ける。」

まさか、俺は5600のダメージを受けるのか……？

「ぐわああああああああああ！」

俺のライフポイントは残り2400。つまり、次SATRUNが復活したら、それをカード効果で破壊してはいけないということだ。

「俺は、暗黒界の狩人ブラウを召喚。さらに、それを手札に戻し、墓地からグラファを特殊召喚！」

「さらに、グラファでダイレクトアタック！」

「僕は、罠発動。リビングデッドの呼び声。墓地から、SATRUNを特殊召喚！」

SATRUNの攻撃力は2800。グラファの攻撃力は2700。これでは勝てない。

「なら、カードを一枚セットしてターンエンド。」

平

7000 手札一枚

SATRUN セットカード一枚

達也

2400

手札三枚

グラファ セットカード一枚

「さて、僕のターンだ。」



The big SATRUN (後書き)

平君の「テツキよくわからないですね。自分でもわからないですね。

プラネット・シーラーズを持つ「ひとは……」（前書き）

今回は少し短くなりました。

「プラネットシーラーズを持つ」とは……

「ドロー。」

「僕は、SATRUNの効果発動。」

SATRUNには、もう一つの効果があったのか！？

「手札を一枚捨て、1000ライフ払う。そして、SATRUNの攻撃力は1000ポイントアップする。」

攻撃力3800だと……。

「バトルフェイズ！SATRUNでグラファに攻撃！」

「ぐつ……」

「僕はこれでターンエンドだ。」

これに賭ける！

「ハンド前に魔法発動。終焉の焰！黒焰トークン一体を特殊召喚！』

次のターン、SUNをだせば攻撃力はSATRUNを上回る。さらに、もし破壊されても復活できる。

「俺のターン。ドロー。」

「黒焰トークン一体をリリースして、The supremacy

SUNを召喚ー。」

デッキ40枚の中に、一枚しか入っていないのに毎デュエル引くという、積込疑惑のあるカードだ。けつして、俺が積込んだわけではない。……マジで。

「やつと出たね。SUN。」

「俺は、SUNでSATURNを攻撃！」

そんなことをしていると、俺の結構後ろにあかりが来た。

「（ふり、やつとあかりさんが来たよ。）ほんとこいいのかい？」

「ああ。SATURNが破壊されたくなれば、ネクロ・ガードナーの効果を使えよー。」

「いや、使わない。」

SUNがSATURNを破壊した余波が平……だったか？を襲う。

「俺は、カードをさらに一枚セットしてターンエンドだ。」

平

5800 手札一枚  
セットカード一枚

達也

1300 手札三枚

SUNE セットカード一枚

「僕のターンだ。ドロー。」

「そろそろ、デュエルを終わらせるとするか……」

「何だつて！？このターンで決着をつけるのかー？」

「僕は、闇・道化師のペーテンを召喚。」

攻撃力500のモンスターだ。たしか、効果は墓地へ送られた時、このカードを墓地から除外し、手札・デッキから闇・道化師のペーテンを特殊召喚する……だった気がする。

「そんな、カードでどうするんだ？」

「僕は、ペーテンでSUNEを攻撃。」

「！？何故だ？」

「ぐつ……。」

平が喘ぐ。

「ペーテンの効果発動。墓地から除外し、新たなペーテンを特殊召喚！そして、もう一度攻撃！」

これで、平の残りライフポイントは800だ。

「なにがしたいんだ？」

「フッ…… もうロペーテンの効果発動！そして、SUNに攻撃！」

これじゃ、奴の負けじゃないか！

800 - 2500 = - 1700

デュエルがきまつた。だが、それを見ていた人も平が何をしたかったのかがわかつていらないみたいだ。そのまま、SUNが闇みたいなのを吸収し、The big SATURNは俺のものになつた。

「あいつ……最後まで何を伏せていたんだ？」

俺は、平のもとに行って、セットカードを確認した。

リミッター解除 奈落の落とし穴

……これは、たしか最初から伏せてあつたカード……。ところどは、SATURNの攻撃の時にリミッター解除を使えば、ここでの勝ちだつたじゃないか！

「どうして……。」

「フフッ……ビックリしちゃ僕にはプラネットシリーズは集められないとね。」

「どうこうことだ？」「

「僕には、プラネットシリーズの力を抑えきれないんだよ。持てて一枚だ。」

俺もそんな力を抑えきれると思えないのだが……

「君の持つてるUFCの影響じゃないかな？あれば、僕のSATR UFCを回収する時もなにかしていたじゃないか。」

・・・・・私は、他のプラネットシリーズを無力化することがで  
きる。・・・・・

ほんとかよ……

「そうこうことなら、佐藤君に勝つとけばよかつたなあ。」

……危なかった……。ほんとなら、俺は一枚しか集められずに負けてしまつといふだつたつてことか……。

「そんなことより、いいのかな？精霊が見えない他のプラネットシリーズ使いが自我を失つてデュエルを挑んでくるかもよ？」

俺が振り返ると……

そこには、明らかにおかしな雰囲気が人がいた。

辰哉の時と同じような黒いオーラをまとっていた。

それは俺達が「あかり」と呼んでいた人だった。

「デュエル……。」

何故、俺のまわりにはいつもプラネットシリーズ使いが多いのだろう。

「いいぜ。やるわ。」

「決闘！！」

プラネットシリーズを持つことは……（後書き）

連続でテュエルです。説明は次回……？

## The ~~and~~ JUPITER (前書き)

説明をすむ、と前回書いたおきながら、説明できませんでした。  
すいません。

## The grand JUPITER

勢いでデュエルを始めたが、いまいち状況がよくわからない。

平はあかりがプラネットシリーズを持っていたことを知っていたようだし、しかも、こいつはそれを見るためだけにプラネットシリーズを渡してまで、俺に負けたようにも思える。

しかも、黒いオーラが辰哉の時よりも多くなっているように見える。

……考へても始まらないか。

「俺のターン。ドロー。」

……やっぱり初手にきたか。

「俺は手札からフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動。ライフを2000払って、SUNを召喚！」

最初からSUNが出せると頼もしい。

さらに、黒いフィールドが展開された。

「カードを一枚セットして、ターンエンダ。」

「私のターン……。ドロー。」

ねえ、なんで口調変わってるのー?辰哉の時にも思ったけど、一人称も変わってるから、恐い……。

「私は魔法発動……。サイクロン。セットカードを破壊。」

「なら、チヨーンして終焉の焰を発動、黒焰トーケンを一体特殊召喚。」

「では、モンスター一体をセット……。さらに、カードを一枚セットしターンエンド。」

クリボーデッキなら、あのセットモンスターはキラー・トマトか？

達也

6000 手札三枚

SUN 黒焰トーケン一体 死皇帝の陵墓

あかり

8000 手札三枚

セットモンスター一体 セットカード一枚

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、黒焰トーケン一体をリリースして、墮天使アスモデュウスをアドバンス召喚！」

攻撃力3000のモンスターが一体並んだ。セットできるカードがないのがいたいが……。

「アスマデュウスの効果を発動し、デッキから墮天使スペルビアを

墓地へ送る。」

「さりに、俺はＳＵＮでセットモンスターを攻撃！」

「コーリング・ノヴァ

「コーリング・ノヴァだつて？それが、クリボーテッキに入るのか？たしかに、クリボンは出せるが……。

「私はデッキから「コーリング・ノヴァを特殊召喚……。」

「なら、さらにアスマモデウスで攻撃！」

「私はデッキからオネストを特殊召喚……。」

「オネスト……あかりのデッキには絶対に入らないだろう。

とすると、あれはあかりの新しいデッキか。

「俺はターンハンドだ。」

「さらに、私のターン……。ドロー。」

「私はオネストの効果を発動……。オネストを手札に戻す。そして、ライフを2000払い、降臨せよ、The grand JUPITER！」

The grand JUPITER  
レベル8 攻撃力2500／守備力2000

「プラネットシリーズ……。胸のあたりに、木星があるモンスターだ。禍々しさは、SUNに勝るとも劣らない。」

「JUPITERの効果発動……。一ターンに一度、手札を一枚捨てることで相手モンスターをこのモンスターに装備し、その分攻撃力をアップさせる。私は墮天使アスモデウスを装備し、攻撃力を3000アップさせる。」

「攻撃力5500……。しかも、アスモデウスが奪われた。プラネットシリーズとしては、SUNを奪いたかったのだろうが、アスモデウスは破壊され墓地へ送られると、効果破壊されないアスマトーケンと、戦闘破壊されないデュウストーケンが出てくる。それは厄介だな。」

「私はJUPITERでSUNを攻撃……。」

「ぐつ……。」

「私はターンエンド……。」

「JUPITERか。召喚時に神の警告や奈落の落とし穴を発動できなかつたのがつらい。」

達也

3500 手札三枚

死皇帝の陵墓

あかり

6000 手札一枚  
JUPITER セットカード一枚

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、スタンバイフェイズに手札を一枚捨て、墓地からSUNを特殊召喚！さらに、手札から魔法発動。サイクロン。アスモデウスを破壊！」

「さらに、アスモデウスの効果を発動し、トークン一体を特殊召喚。さらに、その一体をリリースして、アテナを召喚！」

「SUNでJUPITERを攻撃！さらに、アテナでダイレクトアタック！」

SUNの黒い光線がJUPITERを覆い、その上でアテナがあかりに向かって攻撃した。

「俺は、ターンエンド。」

「私のターン……。ドロー。」

「私はセットされていた魔法発動……。神の居城 ヴァルハラ。手札から、マスター・フェペリオンを特殊召喚。」

「その時、アテナの効果が発動し600ダメージを与える。」

ただ、微々たるダメージだ。

「マスター・ヒュペリオンの効果発動……。墓地から、コーリング・ノヴァを除外して、アテナを破壊。」

だが、今ままではあかりはＳＵＮを破壊できない。

「私は死皇帝の陵墓の効果発動……。」

死皇帝の陵墓はフイールド魔法のため、相手も効果が使える。

「ライフポイントを2000払つ……。降臨せよ、The spirit endid VENUS!」

とてもふくしい女の天使が雲の狭間から光を帯びながら降臨する。

つつか、一体目だと！？

だから、黒いオーラが多かつたのか……。

だが、攻撃力は2800。まだＳＵＮの攻撃力は越えられていない。

「私は魔法発動……。死者蘇生。墓地から、The grand JUPITERを特殊召喚！」

二体のプラネットシリーズが並んだ。だが、三体モンスターが並んだところで攻撃力が3000を越えるモンスターはない。

「私は、マスター・ヒュペリオンでＳＵＮを攻撃……。」

「なつ……、攻撃力はこっちの方が上じやないのか？」

「VENUSがフィールド上に存在する限り、天使族以外の攻撃力と守備力は500ポイントダウンする……。」

なんだつて……

「さらい、JUPITERでダイレクトアタック！」

JUPITERが俺に迫ってきたと思ったら、その時には俺は10mくらい吹っ飛ばされていた。

「どうめ……。VENUSでダイレクトアタック！」

VENUSの体中から光が放出され、俺はその光に包まれた。

俺は、  
負けた。



The grand JUPITER（後書き）

主人公負けましたけど、別に、これで終わりってわけじゃないです。  
これからも、よろしくお願いします。

## 新たな一步（前書き）

第2章に入りました！

デュエル決着前

恭輔 side

とうとう、デュエルが始まったね。

あかりさんは地区大会の時点ではプラネットシリーズを一枚持っていた。大会中に一人のプラネットシリーズ使いとデュエルするのは、不幸としか言いようがないけど。

……むしろ、僕が気になるのは、あかりさんは一回戦ではプラネットシリーズを一枚も持つてなかつたはずなのに、僕に負けたときには一枚のプラネットシリーズを持っていたこと。プラネットシリーズ同士のデュエルじゃないと、相手のプラネットシリーズは回収できないはずなのに。

と、すると、大会中にプラネットシリーズを譲り受けたか、プラネットシリーズの特性が変化して、普通の人とのデュエルでも持ち主がかわるようになったか、だね。

プラネットシリーズの特性が変化したんだとすると、面倒だけど……

お、それから、決着がつくみたいだ。

「ヒルめ……。VENUSでダイレクトアタック！」

白い光があたりを包みこむ。

あかりさんの勝ちだ。

プラネットシリーズは全部で9種類、ここにはその内5種類、つまり半分以上を集めたあかりさんがいる。そうすれば、互いに引き合つた、プラネットシリーズを保有する世界に移動することができるはずだ。少なくとも、あの人は言っていた。プラネットシリーズのこととは言つてなかつたけど、プラネットシリーズを手にしたことがある、今ならわかる！

これで、十一異世界のどこかに行つてしまつた父さんに会える……！

「咲、飛び込むよー」

「わかりました。……つー別の世界！？」

「なんだつて！？」

佐藤君や、あかりさんは別の次元の裂け目が僕達の近くにできていた。このままでは、彼らは別の次元に飛んでしまう！同じ十一異世界とはいっても、交わるのは少ないだろう。

「ぐつ……！」

だけど、僕らの抵抗も虚しく、僕らは佐藤君達とは別の異世界へ飛んでしまった。

達也 side

？？？

「……………」

俺が目を開けると、そこには

白いベッド

日が差し込む明るいベランダ

などといった、高級ホテルの一室だった。

「そうか……、確か、俺はプラネットシリーズに取り憑かれていたあかりに負けて……」

その後白い光に包まれて……氣を失つて……

で、なんでここにいるんだ?????

俺は、とりあえずベランダに出て外を見る。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK.C.とかかれた車が通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

「……そうだつ…SUNはー!？」

俺は、デッキケースを確認する。デッキ枚数は39枚だった。そのなんかには、SUNは無かつた。だれかとトレードするために持つてきていた、ファイルにも、MERCURYは無かつた。

「……もちろん、SATRUNも無いよな……。」

ずっと、握っていたはずのSATRUNも既に、無かつた。

「で、何で俺はここにいるんだ？」

そういえば、さっき外を見たら海馬コーポレーションとか、デュエルアカデミアの写真とかがあつた気が……

「そんな」とはなじよな。」

俺は、もう一度外を見てみる。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK.C.とかかれた車が通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

! ?

さらに、もう一度見てみる。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK.C.とかがれた車が通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

おお。

「……」は、アニメかマンガの遊戯王の世界なのか……？」

あとで考えてみると、俺はこの時何故ここまで冷静だったのかがわからない。普通なら、狂つてもおかしくないのに。やはり、プラネットシリーズと関わったことが大きいのか。

そういうえば、SUNが前に、

・・・・・プラネットシリーズは本来この世界には存在しなかつた。しかし、何者かの力によって新たな12個の異世界が生まれ、その

世界達との世界がぶつかったことにより、その世界にあったプラネットシリーズの一部がこの世界にやってきてしまったのだ。まあ、こいつ言う私もプラネットシリーズの一枚だがな・・・

と、言つていたような気がする。

確かに、「1~2個の異世界」という設定は、遊戯王GXの設定だが……

となると、「こゝは遊戯王GXの世界といふことでいいのか?

デッキは大会用（出ないけど）に、たくさん持つてきていたし、カードファイルだって持つている。だが、他には何もない。

……ま、いつか。こゝじゃデュエルで勝てば、犯罪も許される世界だし。

つつか、ここに居ていいのかな。とりあえず、出るか。鍵っぽいのも持つてないから、ばれると拙いしねえ。

「だれだー。どうして中に入れたんだ！」

出でつと黙つたけど、捕まつちゃた。なんでも、こじみ、海馬ロー  
ボレーションが造つた、要人用のホテルらしい。最悪のところだ  
つたりしー。

だが、俺には、相手の言葉を無視して強制的にデコルセルせる、遊  
星のあの台詞がある！

「おー、デコルセルするよ。」

言えた……一平の時にも言つたけど。

「……いいだね。お前が勝つたなら逃がしてやる。」

……マジかよ……。本当に通用すると、ゾクッとするよな。

「「決闘……」」

10分後

「勝った……。なんか、可哀相……。」

少なくとも、モリンフェンを三体並べられて負けるのは屈辱だろう。ちなみに、エクシーズやシンクロは使っていない。危ないし。

「じゃ、じゃあ、帰つていいですよね。」

ビーム帰るんだよ……。

「ちょっと待て……。モリンフェンを三体並べるとは、かなりのデュエルタクトイクスと見た。海馬社長をお呼びする。」

……俺は、海馬社長を呼びたい時に呼べる人をモリンフェンで倒したのか。

1時間後

俺は、この1時間かなりよくしてもらった。住所不定、どうやつて入ったかもわからない人をここまでしてもらつなんて……「デュエルはここにじゅ絶対だな。

などと思っていると、あの人があつてきた。

海馬社長だ！

「どうした、何があつたのだ。」

「それが……この少年、モリンフンを三体も並べて私に勝つたのです！」

「何だと…」

うん、皆驚くよね。もといた世界では、夢だったし。

「名前はなんとこ？？」

「佐藤達也です。」

「 さうか、達也、デュエルしろ。コイツを倒した実力を見せてみろ！」

「 うなるよな。でも、やつてみたかったんだ！」

「 光栄です。では、やりましょつか。」

「 「 決闘！—」」

## 新たな一步（後書き）

いきなりの急展開です。

ちなみに、プラネットシリーズは10枚ありますが、彼らは9枚だ  
と思い込んでいます。

あと、GXの原作に少し介入しますが、GXのストーリーの途中か  
らです。平君の行った、12個の世界の内、一つに接触しないとい  
けないので、少なくとも異世界編まではやります。

GXを確認しながら書くので、更新が遅くなります。すいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4844z/>

遊戯王～プラネットシリーズと共に～

2011年12月28日22時59分発行